

【表紙】

【提出書類】	四半期報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の7第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成25年8月13日
【四半期会計期間】	第129期第1四半期（自平成25年4月1日至平成25年6月30日）
【会社名】	シチズンホールディングス株式会社
【英訳名】	Citizen Holdings Co., Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 戸倉 敏夫
【本店の所在の場所】	東京都西東京市田無町六丁目1番12号
【電話番号】	042(466)1231（代表）
【事務連絡者氏名】	取締役経営企画部担当 椛田 茂
【最寄りの連絡場所】	東京都西東京市田無町六丁目1番12号
【電話番号】	042(466)1231（代表）
【事務連絡者氏名】	取締役経営企画部担当 椛田 茂
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

回次	第128期 第1四半期連結 累計期間	第129期 第1四半期連結 累計期間	第128期
会計期間	自平成24年 4月1日 至平成24年 6月30日	自平成25年 4月1日 至平成25年 6月30日	自平成24年 4月1日 至平成25年 3月31日
売上高(百万円)	65,298	69,978	272,050
経常利益(百万円)	2,679	4,375	13,805
四半期(当期)純利益又は 四半期(当期)純損失() (百万円)	2,009	2,632	8,855
四半期包括利益又は包括利益(百万円)	2,910	7,902	4,336
純資産額(百万円)	186,641	198,751	192,409
総資産額(百万円)	336,080	377,821	354,670
1株当たり四半期(当期)純利益金額又は 1株当たり四半期(当期)純損失金額() (円)	6.20	8.13	27.33
潜在株式調整後1株当たり四半期(当期)純利 益金額(円)	-	-	-
自己資本比率(%)	54.57	51.79	53.26

(注) 1. 当社は四半期連結財務諸表を作成しておりますので、提出会社の主要な経営指標等の推移については記載しておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり四半期(当期)純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 売上高には、消費税等(消費税及び地方消費税をいう、以下同じ。)は含まれておりません。

2【事業の内容】

当第1四半期連結累計期間において、当社グループ(当社及び当社の関係会社)が営む事業の内容について、重要な変更はありません。また、主要な関係会社における異動もありません。

第2【事業の状況】

1【事業等のリスク】

当第1四半期連結累計期間において、新たに発生した事業等のリスクはありません。また、前事業年度の有価証券報告書に記載した事業等のリスクについて重要な変更はありません。

2【経営上の重要な契約等】

当第1四半期連結会計期間において、経営上の重要な契約等の決定又は締結等はありません。

3【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 業績の状況

当第1四半期連結累計期間におけるわが国経済は、為替相場の円安進行など明るい材料も出てきたことで、景気に持ち直しの動きが見られました。また、米国経済も、増税や歳出削減等の影響が懸念されながらも、個人消費を中心に底堅さを保ちました。一方、欧州経済は、雇用環境の悪化や債務問題の長期化から引き続き低調に推移し、中国をはじめとするアジア新興国においても景気の減速感が強まりました。

このような状況の中、当第1四半期の連結経営成績は、売上高699億円（前年同期比7.2%増）、営業利益は35億円（同7.9%増）と、増収増益となりました。

セグメントの業績は、次のとおりであります。

時計事業

ウォッチ販売のうち、“CITIZEN”ブランドの国内市場は、百貨店などを中心に高額品の販売が好調に推移した他、主力製品の「アテッサ」、「クロスシー」も引き続き売上を伸ばし、増収となりました。海外市場は、欧州の景気低迷や、中国の景気減速等により売上を落としましたが、米国の好調と円安の影響を受け、大幅な増収となりました。海外の主要市場別では、米国市場は、景気が順調に回復する中、引き続きエコ・ドライブの新製品が好調に推移し、大幅な増収となりました。欧州市場は、欧州全体で景気回復の兆しが見えず、ドイツ・イタリア等の主要国においても苦戦を強いられましたが、イギリスが堅調に推移した他、円安の影響もあり、増収となりました。アジア市場は、アセアン地域においては、経済が低迷するインドなど、一部で厳しい市況環境も見られましたが、その他の地域は概ね堅調に推移し、昨年並となりました。しかし、中国において、経済成長鈍化の影響等から顧客の仕入控えが続いたこと等を受け、アジア市場全体では大幅な減収となりました。

“BULOVA”ブランドは、主要販売地域である米国市場において、大手デパートの売上が伸び、大幅な増収となりました。

“Q&Q”ブランドの国内市場は、ソーラー電波時計が好調に推移しましたが、その他の商品の販売が落ち込み、減収となりました。海外市場では、アジア・中近東市場が好調に推移した他、中南米市場も堅調に売上を伸ばし、大幅な増収となりました。

ムーブメント販売は、依然として欧州や中国の経済減速の影響はあるものの、普及価格帯製品を中心に受注が回復傾向を辿り、増収となりました。

以上の結果、時計事業全体では、売上高364億円（前年同期比16.8%増）、営業利益29億円（同45.7%増）と、増収増益となりました。

工作機械事業

国内市場は、市況に明るさを取り戻しつつあるものの、顧客の設備投資判断は総じて慎重なままであり、また、精密機器、建機、電機・電子関連業種の低迷も影響し、減収となりました。アジア市場は、中国市場が依然として不透明な中にあること、およびアセアン地域の自動車・二輪関連において、昨年のタイ洪水需要で設備の需要が一巡したこと等により、減収となりました。米国市場は、自動車・航空機関連を中心に市況回復が顕著となる中、現地の展示会効果も功を奏し、増収となりました。欧州市場は、地域や業種により差は残るものの景気の底打ち感が始まっており、上向き傾向にある市場の商機を捉え、増収となりました。

このような状況の中、“シンコム”ブランドは、国内、アジア地域が増収となりましたが、欧米地域が健闘をしました。

“ミヤノ”ブランドは、米国市場で増収となりましたが、国内、欧州、アジア地域が落ち込みました。

以上の結果、工作機械事業全体では、売上高83億円（前年同期比12.9%減）、営業損失0億円（前年同期は10億円の営業利益）と、減収減益となりました。

デバイス事業

精密加工部品のうち、自動車部品は、国内自動車販売が前年度寄与したエコカー補助金効果の反動減に見舞われましたが、ハイブリッド車向けを中心に堅調に推移した他、海外市場も米国を中心に回復基調を辿っており、増収となりました。また、スイッチは、スマートフォン向けのサイドスイッチが、小型・薄型・高クリック感・防水機能等の強みを生かし好調に推移した結果、増収となりました。

オプトデバイスのうち、照明用LEDは、競争環境の激化に伴い価格下落が進むなど、厳しい市場環境が続く中、新製品を中心にハイワット製品が順調に受注を拡大し、北米、欧州、アジア、日本と幅広い地域で増収となりました。また、バックライトユニットは、車載向け製品の売上が安定的に推移し、増収となりました。

強誘電液晶マイクロディスプレイは、主要顧客の生産調整が続き受注が低迷したほか、別方式ディスプレイとの競合、EVF（Electronic View Finder）非搭載カメラの増加などにより、減収となりました。水晶デバイスは、音叉型水晶振動子が、戦略転換に伴う事業縮小を進めたことで減収となりましたが、水晶片が、スマートフォン市場の好調を背景に高い需要を維持したことで売上を伸ばし、水晶デバイス全体では増収となりました。

以上の結果、デバイス事業全体では、売上高162億円（前年同期比5.7%増）、営業利益11億円（同93.1%増）と、増収増益となりました。

電子機器事業

プリンター関連のうち、POSプリンターおよびラベルプリンターは、国内およびアジア地域向けは顧客の設備投資意欲が回復しないことにより減収となりましたが、米国市場及び欧州市場向けは新規受注もあり増収となりました。また、中国地域を主体とした大型プリンターも好調に推移した他、フォトプリンターも、新規受注と置き換え需要の増加により売上を伸ばしました。以上の結果、プリンター全体では増収となりました。

健康機器は、国内市場は前年並みの推移となったものの、海外市場は、中国が増収となった他、米国市場も既存顧客向けを中心に売上を伸ばし、増収となりました。

電卓は、東欧・ロシアを中心とした欧州向けが商流変更に伴う出荷調整の影響により大幅に売上を落とし、減収となりました。

以上の結果、電子機器事業全体では、売上高57億円（前年同期比18.3%増）、営業利益3億円（前年同期比618.0%増）と、増収増益となりました。

その他の事業

球機用機器は、製品規格の変更や消費税改正が見込まれていることから、顧客の設備投資に対する様子見姿勢が一層強まったことで、主力製品の販売にも大きく影響を及ぼし、大幅な減収となりました。

宝飾製品は、マリッジリングの新製品投入によりプライダルジュエリーが健闘したものの、一般ジュエリーの催事販売、店頭販売がともに伸び悩み、減収となりました。

以上の結果、その他の事業全体では、売上高32億円（前年同期比25.3%減）、営業損失1億円（前年同期は3億円の営業利益）と、減収減益となりました。

(2) 財政状態の分析

当第1四半期連結会計期間末の総資産は、前連結会計年度末に比べ231億円増加し、3,778億円となりました。資産のうち、流動資産は、現金及び預金が179億円、たな卸資産が21億円増加したこと等により、222億円の増加となりました。固定資産につきましては、繰延税金資産が10億円減少した一方、投資有価証券が15億円増加したこと等により8億円の増加となりました。

負債は、前連結会計年度末に比べ、長期借入金が100億円増加したこと等により168億円増加し、1,790億円となりました。

純資産につきましては、前連結会計年度末に比べ、為替換算調整勘定が37億円増加したこと等により、63億円増加し、1,987億円となりました。

(3) 事業上及び財務上の対処すべき課題

平成25年2月に、平成31年3月期を最終年度とする中期経営計画「シチズングローバルプラン2018」（以下「本中期経営計画」という。）を策定しました。

本中期経営計画におけるスローガンを「真のグローバル企業を目指して～スピードと活力の溢れる企業グループへ～」と定め、以下の2項目を基本的な経営方針として、グローバルな市場において求められる「価値」を継続して提供できる「真のグローバル企業」を目指してまいります。

1. 時計事業及び時計製造で培われた強みを生かせる領域、すなわち工作機械事業及び金属加工技術を生かした小型精密部品事業にフォーカスし、カテゴリートップクラスのグローバル競争力を持つ事業の集合体を目指します。

2. 中国・アジア新興国を戦略市場と位置付け、売上拡大と効率化を同時に進め、利益成長を加速します。

本中期経営計画では、当初の3年間（平成26～28年3月期）に徹底した構造改革と体質の強化を行い、次の3年間（平成29～31年3月期）でコスト構造改革により捻出した資金を積極的に成長投資に振り向けることで業績の拡大を図り、平成31年3月期のありたい姿である「世界で勝ち抜く真のグローバル企業」を目指してまいります。

まず、当初の3年間（平成26～28年3月期）では、当社が抱える経営課題を克服すべく、以下の5項目に重点的に取り組んでまいります。

1. 徹底したコスト構造改革

各事業会社は、必要により人員、会社数、拠点数などの適正化を図り、中期の早い段階で筋肉質な経営体質の構築を図る。

2. 事業ポートフォリオの明確化

時計事業

「グループ成長の核」とし、グループの経営資源を集中する。

工作機械事業

時計事業に次ぐ「第2の柱」へと育成する。

小型精密部品事業

当社グループが持つ金属加工技術の強みを生かし、次なる成長事業へ育成する。

デバイス事業、電子機器事業及びその他の事業

売上拡大より、利益の向上による経営の安定を優先する。

3. 製造力の強化

以下の視点を含む現状の点検と見直しを行い、製造力の強化に取り組む。

自前生産主義から脱却し、自社のコアコンピタンスを見極めた上で外部調達との適切なバランスを図る。

国内生産（付加価値の創造）と海外生産（コストの追求）の役割分担に応じたグローバル生産体制の最適化を促進する。

中国一極集中によるリスクを回避する。

4. 人の生産性改善と人材力強化

人・組織の活性化を目的に、役割と成果に応じた報酬体系へと移行する。

中長期的にグループを支える人材を育成する。

グローバルに活躍できる人材を育成する。

多層化した組織や重複業務等を見直し、人の生産性の改善を推し進める。

5. 拡大するアジア新興国市場への積極的なマーケティング対応

特に時計事業において、マーケティングへの積極投資による売上拡大を遂げた中国での成長スキームを周辺アジアに移植し、中国・アジアでの成長を加速させ、シチズンの世界的なブランドプレゼンスの底上げを図る。

本中期経営計画における事業別の戦略としましては、

1．時計事業

「製品からブランドへ」のスローガンのもとにブランド・マーケティングを強化してまいります。特に中国・アジア新興国を戦略的拡販市場と位置づけ、積極的に投資を行い、高利益率体質を実現してまいります。また、流通チャネルへの影響力を最大化し、既存の販売領域を保全・拡大するとともに、シチズンブランドの販売拡大に資する目的でマルチブランド戦略も合わせて推進することにより、時計事業全体の売上拡大を図ってまいります。

2．工作機械事業

時計部品の製造で培われた小型化技術及び高剛性技術に基づき最先端のソリューションを顧客に提供する「新・モノづくり企業」のポジションを確立することで自動盤トップシェアの地位を確固たるものとしてまいります。

3．デバイス事業

小型精密部品事業は当社グループの強みである金属部品や脆性材の加工技術を生かし、グローバルニッチ市場での拡大を目指します。

その他のデバイス製品事業については売上拡大よりも利益の安定を優先してまいります。特に、LED製品については、当社グループ独自の強みである小型化、薄型化等を追求しつつ、資本・業務提携を通じて利益の安定・拡大を目指します。

4．電子機器事業

高品質・高信頼性の業務用プリンターとフォトプリンターを事業の核とし、グローバルニッチ市場を中心とした事業展開を図り、安定的な利益の創出を目指します。

以上の取組み・戦略を推進することで、売上拡大と効率化を同時に進め、利益成長を加速させてまいります。

(会社の財務及び事業の方針の決定を支配する者の在り方に関する基本方針について)

(1) 基本方針の内容

当社グループはその名のとおり、世界の市民「CITIZEN」によりよい製品・サービスを提供することを使命とし、“For the citizen - 市民に愛され市民に貢献する - ”という企業理念のもと、「市民に愛され親しまれるモノづくり」を通じて世界の人々の暮らしに貢献することによって、企業価値・株主共同の利益の確保・向上に努めてまいりました。当社は、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者は、このような当社グループの企業理念や事業特性を理解したうえで、グループ経営戦略を中長期的視点に立って着実に実行し、当社が今後も持続的に企業価値・株主共同の利益を確保・向上させていくことを可能とする者でなければならないと考えております。

当社は、当社に対して大規模買付行為が行われた場合においても、これに応じるべきか否かは、最終的には株主の皆様判断に委ねられるべきであると考えており、大規模買付行為であっても、当社の企業価値・株主共同の利益に資するものであれば、これを一概に否定するものではありません。

しかしながら、現時点における法制度、金融環境を前提とした場合、その目的・手法等から見て、真摯に合理的な経営を目指すものではなく、会社に回復し難い損害をもたらすもの、株主に株式の売却を事実上強要するおそれがあるもの、対象会社の株主や取締役会が買付けの条件等について検討し、あるいは対象会社の取締役会が代替案を提示するための十分な時間や情報を提供しないもの、対象会社が買付者の提示した条件よりも有利な条件をもたらすために買付者との交渉を必要とするものなど、当社の企業価値・株主共同の利益に資さないものも想定されます。

当社は、このような大規模買付行為を行う者は、例外的に、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者として適当ではないと考えており、当社の企業価値・株主共同の利益に反する買付行為を抑止するための枠組みが必要不可欠であると考えております。

(2) 基本方針の実現に資する特別な取組み

当社は、多数の株主の皆様、当社の企業価値をご理解いただいたうえで長期的に当社の株式を保有していただくために、様々な施策を実施してまいりました。

例えば、平成25年2月には、平成31年3月期を最終年度とする中期経営計画「シチズングローバルプラン2018」を策定しました。詳細は、「第2 事業の状況 3. 財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 (3) 事業上及び財務上の対処すべき課題」に記載のとおりであります。

(3) 基本方針に照らして不適切な者による支配を防止する取組み

当社の企業価値及び株主共同の利益を確保し、向上させることを目的として平成19年5月14日開催の取締役会において導入し、同年6月26日開催の第122期定時株主総会において株主の皆様のご承認を受けました。当社株券等の大規模買付行為に関する対応方針の有効期間が満了することに伴い、当社は、平成22年5月11日開催の取締役会において、これを一部変更したうえで更新すること(以下、かかる変更後の方針を「旧方針」といいます。)を決定し、同年6月25日開催の第125期定時株主総会において、株主の皆様のご承認を受けました。

平成25年6月27日開催の第128期定時株主総会終結の時をもって旧方針の有効期間が満了することから、同年5月23日開催の取締役会において、上記(1)の基本方針を改めて決議するとともに、旧方針を一部変更したうえで更新することにつき、同年6月27日開催の第128期定時株主総会において、株主の皆様のご承認を受けております(以下、かかる変更後の方針を「本方針」といいます。)

本方針の内容は以下のとおりであります。

対象となる買付

本方針の対象となる買付は、特定株主グループの議決権割合が20%以上となる当社株式の買付行為等であります。

手続

大規模買付者が、事前に当社取締役会に対して必要かつ十分な情報を提供し、当社取締役会による一定の評価期間が経過した後に大規模買付行為を開始することを手続として定めております。

対抗措置の内容

大規模買付者が手続を守らない場合等には、当社取締役会は、独立委員会の勧告に基づいて、その時点のすべての株主の方に対して、新株予約権の無償割当てを行います。新株予約権の無償割当てを行う場合には、対抗措置としての効果を勘案した行使期間、行使条件及び取得条項を設けることがあります。

対抗措置発動の要件

当社は、以下の場合に対抗措置としての新株予約権の無償割当てを行うことがあります。

- 1) 大規模買付者が手続を守らない場合
- 2) 真に当社の経営に参加する意思がないにもかかわらず、ただ株価をつり上げて株式を当社または当社関係者に高値で引き取らせる目的であると判断される場合
- 3) 当社の経営を一時的に支配し、当社または当社グループ会社の資産等を大規模買付者やそのグループ会社等に移譲させるなどの目的があると判断される場合
- 4) 当社の経営を支配した後、当社または当社グループ会社の資産を大規模買付者やそのグループ会社等の債務の担保や弁済原資として流用する目的があると判断される場合
- 5) 当社の経営を一時的に支配して、資産の売却等によって一時的な高配当をさせ、あるいは一時的な高配当による株価の急上昇の機会を狙って当社株式の高値売り抜けを目的としていると判断される場合
- 6) 最初の買付で全株式の買付を勧誘せず、二段階目の買付条件を不利に設定し、あるいは明確にしないで公開買付等を行うなど、当社株主の皆様当社株式の売却を事実上強要するおそれがある買付行為である場合

対抗措置発動までのプロセス

独立委員会は、大規模買付者から大規模買付に関する意向表明書が提出された場合、10営業日以内に、大規模買付者から当初提供していただく情報のリストを交付します。なお、独立委員会が、当初提供していただいた情報だけでは不足していると判断した場合には、十分な情報が揃うまで追加的に情報提供をしていただくこともあります。また、独立委員会は、当社取締役会に対して60日を上限とする回答期間を定めて大規模買付行為に対する意見等を求めることがあります。独立委員会は、大規模買付者からの情報の提供及び当社取締役会による情報の提供が完了した後、60日以内に評価、検討、交渉、意見形成を行います。

独立委員会は、これらの情報に基づいて、当社取締役会に対して、対抗措置を発動するか発動しないかの勧告を行い、当社取締役会は、独立委員会の勧告に基づいて、会社法上の機関としての決議を行います。また、独立委員会は、対抗措置の発動について株主総会に付議することが相当である旨の勧告を行う場合があります。この場合、当社取締役会は、株主総会を招集し、対抗措置の発動に関する議案を付議します。

本方針の有効期間

本方針の有効期間は、平成25年6月27日開催の第128期定時株主総会終結の時から3年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会終結の時までとなっております。

(4) 上記(2)及び(3)の取組みについての取締役会の判断及びその理由

基本方針の実現に資する特別な取組みについて

上記(2)の取組みは、当社の企業価値・株主共同の利益を確保・向上させることを直接目的とするものであり、結果として基本方針の実現に資するものです。従って、当該取組みは基本方針に沿い、当社の株主共同の利益に合致するものであり、当社の会社役員の地位の維持を目的とするものではないと判断しております。

基本方針に照らして不適切な者による支配を防止する取組みについて

当社は、以下の諸点を考慮し、織り込むことにより、基本方針に照らして不適切な者による支配を防止する取組みが、基本方針に沿い、当社の株主共同の利益に合致するものであり、当社の会社役員の地位の維持を目的とするものではないと判断しております。

1) 買収防衛策に関する指針の要件を完全に充足していること

本方針は、経済産業省及び法務省が平成17年5月27日に発表した「企業価値・株主共同の利益の確保又は向上のための買収防衛策に関する指針」の定める三原則を完全に充足するとともに、経済産業省の企業価値研究会が平成20年6月30日に公表した「近時の諸環境の変化を踏まえた買収防衛策の在り方」を踏まえたものです。

2) 株主意思を重視するものであること

当社は、平成25年6月27日開催の第128期定時株主総会において、本方針について株主の皆様のご承認を得ております。また、本方針には、その有効期間を約3年間とするサンセット条項が付されているほか、当社取締役の任期は1年となっておりますので、たとえ本方針の有効期間中であっても、取締役の選任を通じて株主の皆様のご意向を示していただくことが可能です。

3) 独立性の高い社外者の判断の重視と情報開示

当社は、取締役の恣意的判断を排除し、本方針の発動及び廃止等の運用に際しての実質的な判断を客観的に行う機関として、独立委員会を設置しております。独立委員会委員は、当社の業務執行を行う経営陣から独立している当社社外取締役または社外の有識者の中から、当社取締役会が選任します。

当社株式に対して大規模買付等がなされた場合には、独立委員会が、独立委員会規則に従い、当該買付等が当社の企業価値・株主共同の利益を毀損するか否か等について取締役会への勧告を行い、当社取締役会はその判断を最大限尊重して新株予約権無償割当ての実施または不実施等に関する会社法上の機関としての決議を行います。

このように、独立委員会によって、取締役が恣意的に対抗措置の発動を行うことのないよう厳しく監視するとともに、独立委員会の判断の概要については株主の皆様へ情報を開示し、当社の企業価値・株主共同の利益に資するべく本方針の透明な運営が行われる仕組みが確保されております。

なお、平成25年6月30日現在の独立委員会委員は、当社社外取締役青木昭明、伊藤健二の両氏と、弁護士の鳥飼重和氏であります。

4) 合理的な客観的要件の設定

本方針は、上記(3)にて記載したとおり、合理的な客観的要件が充足されなければ発動されないように設定されており、当社取締役会による恣意的な発動を防止するための仕組みを確保しております。

5) 第三者専門家の意見の取得

大規模買付者等が出現すると、独立委員会は、当社の費用で、独立した第三者（フィナンシャル・アドバイザー、公認会計士、弁護士、コンサルタントその他の専門家を含む。）の助言を得ること等ができます。これにより、独立委員会による判断の公正さ・客観性がより強く担保される仕組みとしております。

6) デッドハンド型やスローハンド型の買収防衛策ではないこと

本方針は、当社の株主総会で選任された取締役で構成される取締役会によりいつでも廃止することができるものとされており、当社の株券等を大量に買い付けようとする者が、自己の指名する取締役を当社株主総会で選任し、かかる取締役で構成される取締役会により、本方針を廃止することが可能であります。従って、本方針は、デッドハンド型買収防衛策（取締役会の構成員の過半数を交替させてもなお、発動を阻止できない買収防衛策）ではありません。

また、当社は、取締役任期を1年とし期差任期制を採用していないため、本方針はスローハンド型（取締役の交替を一度に行うことができないため、その発動を阻止するのに時間がかかる買収防衛策）でもありません。

（4）研究開発活動

当第1四半期連結累計期間におけるグループ全体の研究開発活動の金額は、1,887百万円であります。

なお、当第1四半期連結累計期間において、当社グループの研究開発活動の状況に重要な変更はありません。

第3【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	959,752,000
計	959,752,000

【発行済株式】

種類	第1四半期会計期間末現在発行数(株) (平成25年6月30日)	提出日現在発行数(株) (平成25年8月13日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	330,353,809	330,353,809	東京証券取引所 市場第一部	権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式であり、単元株式数は100株であります。
計	330,353,809	330,353,809	-	-

(2)【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

(5)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総数増減数 (株)	発行済株式総数残高(株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金増減額 (百万円)	資本準備金残高 (百万円)
平成25年4月1日～ 平成25年6月30日	-	330,353,809	-	32,648	-	36,029

(6)【大株主の状況】

当四半期会計期間は第1四半期会計期間であるため、記載事項はありません。

(7) 【議決権の状況】

当第1四半期会計期間末日現在の「議決権の状況」については、株主名簿の記載内容が確認できないため、記載することができないことから、直前の基準日（平成25年3月31日）に基づく株主名簿による記載をしております。

【発行済株式】

平成25年6月30日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 6,353,800	-	権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式
完全議決権株式(その他)	普通株式 323,401,200	3,234,012	同上
単元未満株式	普通株式 598,809	-	同上
発行済株式総数	330,353,809	-	-
総株主の議決権	-	3,234,012	-

(注) 「完全議決権株式(その他)」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が2,400株含まれております。また、「議決権の数」欄には、同機構名義の完全議決権株式に係る議決権の数24個が含まれております。

【自己株式等】

平成25年6月30日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数(株)	他人名義所有株式数(株)	所有株式数の合計(株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
シチズンホールディングス株式会社	東京都西東京市田無町六丁目1番12号	6,353,800	-	6,353,800	1.92
計	-	6,353,800	-	6,353,800	1.92

(注) 当第1四半期会計期間末日現在における所有自己株式数は6,355,474株であり、発行済株式総数に対する所有株式数の割合は1.92%であります。

2 【役員】の状況】

前事業年度の有価証券報告書提出日後、当四半期累計期間における役員の異動は、次のとおりであります。

(1) 新任役員

該当事項はありません。

(2) 退任役員

該当事項はありません。

(3) 役職の異動

該当事項はありません。

第4【経理の状況】

1．四半期連結財務諸表の作成方法について

当社の四半期連結財務諸表は、「四半期連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（平成19年内閣府令第64号）に基づいて作成しております。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、第1四半期連結会計期間（平成25年4月1日から平成25年6月30日まで）及び第1四半期連結累計期間（平成25年4月1日から平成25年6月30日まで）に係る四半期連結財務諸表について、監査法人日本橋事務所による四半期レビューを受けております。

1【四半期連結財務諸表】

(1)【四半期連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成25年3月31日)	当第1四半期連結会計期間 (平成25年6月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	71,105	89,048
受取手形及び売掛金	3 60,342	3 59,726
商品及び製品	37,646	39,220
仕掛品	20,922	20,638
原材料及び貯蔵品	15,212	16,087
未収消費税等	1,394	596
繰延税金資産	13,005	13,634
その他	7,842	10,793
貸倒引当金	1,603	1,620
流動資産合計	225,868	248,126
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物（純額）	32,063	31,817
機械装置及び運搬具（純額）	20,403	19,720
工具、器具及び備品（純額）	4,024	3,996
土地	11,727	11,747
リース資産（純額）	459	531
建設仮勘定	2,134	3,131
有形固定資産合計	70,813	70,944
無形固定資産		
のれん	7,200	6,954
ソフトウェア	2,097	2,134
リース資産	29	35
その他	5,499	5,595
無形固定資産合計	14,826	14,720
投資その他の資産		
投資有価証券	34,673	36,221
長期貸付金	732	747
繰延税金資産	4,969	3,937
その他	3,775	3,663
貸倒引当金	321	319
投資損失引当金	667	220
投資その他の資産合計	43,162	44,030
固定資産合計	128,801	129,695
資産合計	354,670	377,821

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成25年3月31日)	当第1四半期連結会計期間 (平成25年6月30日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	3 16,174	3 18,084
短期借入金	43,261	44,006
1年内償還予定の社債	500	300
未払法人税等	2,027	1,677
繰延税金負債	14	16
未払費用	11,935	13,092
賞与引当金	4,678	6,771
役員賞与引当金	143	-
製品保証引当金	828	858
設備関係支払手形	3 1,248	553
環境対策引当金	23	23
事業再編整理損失引当金	14,400	11,502
災害損失引当金	38	38
その他	18,363	22,834
流動負債合計	113,638	119,759
固定負債		
社債	10,050	10,050
長期借入金	20,150	30,228
繰延税金負債	546	1,031
退職給付引当金	13,078	13,051
環境対策引当金	63	63
事業再編整理損失引当金	3,326	3,355
資産除去債務	248	248
その他	1,158	1,280
固定負債合計	48,622	59,310
負債合計	162,260	179,070
純資産の部		
株主資本		
資本金	32,648	32,648
資本剰余金	33,890	33,890
利益剰余金	127,080	128,646
自己株式	5,380	5,381
株主資本合計	188,239	189,804
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	5,743	7,193
為替換算調整勘定	5,082	1,320
その他の包括利益累計額合計	661	5,873
少数株主持分	3,508	3,074
純資産合計	192,409	198,751
負債純資産合計	354,670	377,821

(2) 【 四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書】

【 四半期連結損益計算書】

【 第 1 四半期連結累計期間】

(単位 : 百万円)

	前第 1 四半期連結累計期間 (自 平成24年 4 月 1 日 至 平成24年 6 月30日)	当第 1 四半期連結累計期間 (自 平成25年 4 月 1 日 至 平成25年 6 月30日)
売上高	65,298	69,978
売上原価	41,892	44,183
売上総利益	23,406	25,795
販売費及び一般管理費	20,125	22,254
営業利益	3,281	3,541
営業外収益		
受取利息	99	88
受取配当金	313	382
為替差益	-	415
持分法による投資利益	54	76
その他	254	321
営業外収益合計	722	1,283
営業外費用		
支払利息	318	351
為替差損	845	-
その他	160	97
営業外費用合計	1,324	449
経常利益	2,679	4,375
特別利益		
固定資産売却益	62	17
その他	30	17
特別利益合計	93	34
特別損失		
固定資産除却損	43	11
投資有価証券評価損	21	-
固定資産売却損	0	4
その他	29	4
特別損失合計	95	20
税金等調整前四半期純利益	2,677	4,389
法人税等	718	1,706
少数株主損益調整前四半期純利益	1,959	2,683
少数株主利益又は少数株主損失 ()	49	50
四半期純利益	2,009	2,632

【四半期連結包括利益計算書】

【第1四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第1四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年6月30日)	当第1四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年6月30日)
少数株主損益調整前四半期純利益	1,959	2,683
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	1,000	1,450
繰延ヘッジ損益	51	-
為替換算調整勘定	3,803	3,729
持分法適用会社に対する持分相当額	14	39
その他の包括利益合計	4,870	5,219
四半期包括利益	2,910	7,902
(内訳)		
親会社株主に係る四半期包括利益	2,786	7,844
少数株主に係る四半期包括利益	124	57

【注記事項】

(連結の範囲又は持分法適用の範囲の変更)

連結の範囲の重要な変更

当第1四半期連結会計期間より、Sirma Macchine S.R.L.は、重要性を考慮して連結の範囲に含めております。

変更後の連結子会社の数

101社

(四半期連結貸借対照表関係)

1. 保証債務

連結会社以外の会社について、保証を行っております。

	前連結会計年度 (平成25年3月31日)	当第1四半期連結会計期間 (平成25年6月30日)
当社グループの得意先が抱えるリース債務 等に対する保証	479百万円	466百万円

2. 受取手形割引高、輸出手形割引高及び受取手形裏書譲渡高

	前連結会計年度 (平成25年3月31日)	当第1四半期連結会計期間 (平成25年6月30日)
受取手形割引高	- 百万円	224百万円
輸出手形割引高	0	-
受取手形裏書譲渡高	-	6

3. 四半期連結会計期間末日満期手形

四半期連結会計期間末日満期手形の会計処理については、当四半期連結会計期間末日が金融機関の休日でしたが、満期日に決済が行われたものとして処理しております。当四半期連結会計期間末日満期手形の金額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成25年3月31日)	当第1四半期連結会計期間 (平成25年6月30日)
受取手形	638百万円	685百万円
支払手形	58	52
設備関係支払手形	0	-

(四半期連結キャッシュ・フロー計算書関係)

当第1四半期連結累計期間に係る四半期連結キャッシュ・フロー計算書は作成しておりません。なお、第1四半期連結累計期間に係る減価償却費(のれんを除く無形固定資産に係る償却費を含む。)及びのれんの償却額は、次のとおりであります。

	前第1四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年6月30日)	当第1四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年6月30日)
減価償却費	3,274百万円	3,324百万円
のれんの償却額	388	334

(株主資本等関係)

前第1四半期連結累計期間(自平成24年4月1日至平成24年6月30日)

配当に関する事項

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成24年6月22日 定時株主総会	普通株式	1,296	4.00	平成24年3月31日	平成24年6月25日	利益剰余金

当第1四半期連結累計期間(自平成25年4月1日至平成25年6月30日)

配当に関する事項

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成25年6月27日 定時株主総会	普通株式	971	3.00	平成25年3月31日	平成25年6月28日	利益剰余金

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前第1四半期連結累計期間(自平成24年4月1日 至平成24年6月30日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位:百万円)

	時計事業	工作 機械事業	デバイス 事業	電子機器 事業	その他の 事業	合計	調整額 (注)1	四半期 連結損益 計算書 計上額 (注)2
売上高								
外部顧客への 売上高	31,232	9,539	15,338	4,880	4,308	65,298	-	65,298
セグメント間の 内部売上高又は 振替高	735	186	1,411	228	253	2,815	2,815	-
計	31,967	9,726	16,749	5,108	4,561	68,113	2,815	65,298
セグメント 利益	2,032	1,015	604	45	337	4,035	754	3,281

(注)1. セグメント利益(営業利益)の調整額 754百万円には、セグメント間取引消去 13百万円及び各報告セグメントに配分していない全社費用 741百万円が含まれております。

2. セグメント利益は四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

2. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

(のれんの金額の重要な変動)

「時計事業」セグメントにおいて、Prothor Holding S.A.の株式を取得し、子会社化しております。

当該事象によるのれんの増加額は、当第1四半期連結累計期間において4,590百万円であります。なお、取得原価の配分が完了していないため、当第1四半期連結会計期間末において入手可能である合理的な情報に基づき暫定的に算定された金額であります。

当第1四半期連結累計期間(自平成25年4月1日 至平成25年6月30日)

報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位:百万円)

	時計事業	工作 機械事業	デバイス 事業	電子機器 事業	その他の 事業	合計	調整額 (注)1	四半期 連結損益 計算書 計上額 (注)2
売上高								
外部顧客への 売上高	36,469	8,312	16,205	5,773	3,217	69,978	-	69,978
セグメント間の 内部売上高又は 振替高	894	131	1,281	358	185	2,852	2,852	-
計	37,364	8,443	17,487	6,132	3,403	72,831	2,852	69,978
セグメント 利益又は損失()	2,962	95	1,167	326	120	4,240	699	3,541

(注)1. セグメント利益(営業利益)の調整額 699百万円には、セグメント間取引消去38百万円及び各報告セグメントに配分していない全社費用 738百万円が含まれております。

2. セグメント利益又は損失()は四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

(1株当たり情報)

1株当たり四半期純利益金額及び算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前第1四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年6月30日)	当第1四半期連結累計期間 (自平成25年4月1日 至平成25年6月30日)
1株当たり四半期純利益金額	6円20銭	8円13銭
(算定上の基礎)		
四半期純利益金額(百万円)	2,009	2,632
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-	-
普通株式に係る四半期純利益金額(百万円)	2,009	2,632
普通株式の期中平均株式数(千株)	324,003	323,999
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり四半期純利益金額の算定に含めなかった潜在株式で、前連結会計年度末から重要な変動があったものの概要		

(注) 前第1四半期連結累計期間、当第1四半期連結累計期間の潜在株式調整後1株当たり四半期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

2【その他】

該当事項はありません。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の四半期レビュー報告書

平成25年 8月12日

シチズンホールディングス株式会社
取締役会 御中

監査法人 日本橋事務所

指定社員 公認会計士 木下 雅彦 印
業務執行社員

指定社員 公認会計士 矢島 賢一 印
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、「経理の状況」に掲げられているシチズンホールディングス株式会社の平成25年4月1日から平成26年3月31日までの連結会計年度の第1四半期連結会計期間（平成25年4月1日から平成25年6月30日まで）及び第1四半期連結累計期間（平成25年4月1日から平成25年6月30日まで）に係る四半期連結財務諸表、すなわち、四半期連結貸借対照表、四半期連結損益計算書、四半期連結包括利益計算書及び注記について四半期レビューを行った。

四半期連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して四半期連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない四半期連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した四半期レビューに基づいて、独立の立場から四半期連結財務諸表に対する結論を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に準拠して四半期レビューを行った。

四半期レビューにおいては、主として経営者、財務及び会計に関する事項に責任を有する者等に対して実施される質問、分析的手続その他の四半期レビュー手続が実施される。四半期レビュー手続は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して実施される年度の財務諸表の監査に比べて限定された手続である。

当監査法人は、結論の表明の基礎となる証拠を入手したと判断している。

監査人の結論

当監査法人が実施した四半期レビューにおいて、上記の四半期連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して、シチズンホールディングス株式会社及び連結子会社の平成25年6月30日現在の財政状態及び同日をもって終了する第1四半期連結累計期間の経営成績を適正に表示していないと信じさせる事項がすべての重要な点において認められなかった。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

(注) 1. 上記は、四半期レビュー報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（四半期報告書提出会社）が別途保管しております。

2. 四半期連結財務諸表の範囲にはXBR Lデータ自体は含まれていません。